
清水坂下物語

きりもんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清水坂下物語

【ZPDF】

Z5337F

【作者名】

きりもんじ

【あらすじ】

学園紛争の頃、5年前に行方不明になつた彼女と清水で再会した。欧洲の旅を終え、生まれたての赤ん坊とふたりで坂下に住んでいる。いろいろなことがあつたみたいだ。是非話を聞いてほしいといふ。

打ち水

5年ぶりの再会。突然行方不明になっていた昔の女友達が、生まれたばかりの赤ん坊を抱えて修の店の前にたたずんでいた。

朝8時、清水坂の中ほど、産寧坂を登りつめた唐辛子専門店のむかい、土産品店の店頭だった。朝の淡い陽射しに打ち水が心地よい。

『かた、かた、かた』

軽やかな下駄の音と、視線を感じてふと振り向くとまぎれもない、5年前の吉川厚子が母親としてしっかりと赤ん坊を抱きかかえて、修の顔をじっと凝視していた。通りの向こうである。一瞬、

「あつ！」

と小声で叫んだ。間違いない厚子だ。思わず視線をそらせたまま、頭のなかににめまぐるしく過去がよみがえる。

彼女は通りの向こうから近づいてきた。寄はまだいない。
淡い秋口の清水、坂の上であった。

修は腹を決めてうつむき加減の顔を上げた。彼女は、眼をじっと見据えたまま口元だけがかすかに微笑んだ。

「おひさしふり。やつぱり若林さんね」

「ああ、ほんとに久しふり」

男の子か、まだ数ヶ月の赤ん坊だ。

眼がパツチリとしていて修をじっと見つめている。

「私の子よ。かわいいでしょ？」

「ああ」

厚子は赤ん坊を抱え上げ修によく見せようとす。まだ首が据わっていない。

「ほら、あきら君。ひょっとしたら、あなたのパパになっていた人かもよ」

あきら君はじっと修の瞳を見つめていたが、母親の方に振り向きなおしてしつかりと抱きついた。あまりの突然のことに修は全く言葉が出なかった。

「あら、泣かなくてよかつたわねえ。よしよし」もつ母親としての自信が、身体全体からまばゆいばかりに輝き、香つてくる。

やつと何とか心が落着いた。何かひびひ話していいのかさっぱり分からない。

「この近くに住んでるの？」
突拍子のない言葉がついて出た。

「ええ、この坂の下、この子とふたりで。帰国してから半年。大きなおなか抱えて大変だったわよ、空港まで「どうか行つてたんだ」

「ええ」

「・・・・・」

「あれからヨーロッパに旅に出たの。一回帰国して、それからぼぼ二年間スペインで生活してたわ」

「いろいろあつたんだ?」

「そう、いろいろあつたわ」

と、その時客が付いた。

「またくるわね」

赤ん坊はすっかり眠っていた。修は田で合図してうなずいた。じつと見つめる眼差しの奥に、何か人懐かしさが浮んで消えた。

修は5年前まだ学生だった。学園紛争が下火になつて海外へ飛び出し、3年間ヨーロッパを放浪の果てに学園に復学して再び勉強をし始めようとした頃だ。

もう25歳になつていた。向こうで知り合つた君子といつ世話好きでエネルギーッシュな女性と結婚して、智子という女の子が生まれたばかりの頃だつた。

京大の農学部のグランドの北側、田中春奈町というところの安アパートに家族3人で落着いた。

この周辺には学生が多く、結婚した大学院生もかなり住んでいた。近くには歌に出てくるような銭湯があつて、寒い冬には手ぬぐいをマフラーにして毎日通つたものだ。二階には文学部の吉岡千恵子といつ文学部のおしゃまでかわいらしい女の子が住んでいて、すぐ妻の君子と親しくなつた。

ヨーロッパでは少し小銭をためて返つてきたので、この1年間は妻は車の免許と英会話。修は学園紛争の3年分を2年で取り返すべく超過時間割で猛勉強をしていた。

君子はだれとでもすぐに親しくなる、世話好きで活動的な人柄だ。5月のある日、英会話教室からの帰りに君子は友達を連れてきた。それが吉川厚子である。二階の

吉岡千恵子も加わってにぎやかにお茶会が始まった。せりに
インド帰りのアーハちゃん、文学部の山本先輩、ギターのつまい

修の後輩蓮井君たちが次々と集ってきて、土曜の夜には鍋を
囲んで楽しいひと時を過ごしたりした。

厚子は京都生まれの京都育ち。小さな建設会社の娘で父が
亡くなり兄が後をついで一応役員ではある。

短大を卒業して海外へ出るべく今英会話を学んでいる。おつ
とりとした一重まぶたの美人である。その日は夜遅くまで
おしゃべりして厚子はタクシーで伏見稲荷まで帰った。

次の晩、法華經研究会の理学部の鈴木が友人の医大の涌井と民青の竹内とをつれて修の部屋に来た。竹内に涌井と鈴木が「宗教は決してアヘンではない。マルクスが言つたのは当時の形骸化した欧洲のキリスト教のことだ。もし法華經を知ついたらこういう言い回しはしないはずだ。

マルキシズムには必ず人間性を抑圧する限界がある。もつと謙虚に人間の精神、内面性を追及すべきだ云々・・・

難しい話だ。竹内は親の代から共産党で、農村出身の親父が都會のエリート共産党幹部宅を訪ねた時、その蔵書に圧倒されて、親子2代、親父期待の一人息子が党内で頭角を現すことを夢見てきたその親父。親思いの息子は必死でそれに報いようとしていた。

修は今年法華經研究会に入会したばかりだが、年齢がかなり上ということでも18歳の鈴木や涌井達はしじつちゅう出入りしていた。

そういうわけで、若林一家の安アパートの一室はいつも誰かがいて酒を飲み歌を歌い、子供をあやしながらの楽しい青春の穴倉であつた。

12月にはいつた土曜日の午後、又鈴木と涌井が竹内を連れてきた。

「な、竹内、六全協で方向転換したんや。修正マルクス主義、一国だけの共産主義て姑息やで、法華經のほうが普遍的でグローバル

やと思わんか？」

鈴木健一が必死で説得している。鈴木はおばあちゃん子でくじくりとした童顔、竹内とは高校時代からの友人だ。

「親の期待通りに歩む人生か？自分の人生は自分の足でがっちらりと歩むんやと思つけどな」

語り疲れたかのようになに鈴木は天井を見あげてつぶやいた。

竹内は親の期待が相當重いらしく、小柄だが見るからに優等生、親に向かつて反論などとてもできやうにない。

色々と疑問は持つていたのだろうが、ここに来て親友の言葉には心が動く。今まで他の生き方など考えも及ばなかつた。馬車馬の如くわき目も振らず受験勉強に集中してきた。親の夢はまさしく自分の夢でもあつたのだ。

それはただ他の生き方を考えるゆとりも時間もなかつたからだ、又その様に仕向けてきたからだ。そして今たたずみながら路頭に迷つている。

青白い顔のメガネをかけたのっぽの医学生涌井も、柔らかに竹内を勇気づける。

「まず自分の内面の問題やと思つ。宿命転換、人間革命がでけて初めて社会革命や。社会がいくらよくなつても、

人間生命の濁りはようならんと思う。現に太古の昔から嫁と姑の問題や親子の確執。政治と金。ジエラシー蔓延

の嫉妬社会はいくら世の中が変わつても、逆を言えば、これが克服できなければ絶対に世の中は良くならないと思つ。

自らをもよい方向に変革し社会をもよい方向に改革して行く方途は法華経の実践にしかないとと思つ。この50年間で

世界180カ国に広がり国内では1千万人を超す勢いには
真実があればこそだと思うが、どうだい竹内君?」

「・・・・・」

「竹内君、勇気を持つて法華経研究会に入会しよう。実践に
確信がもてるようになつたら、皆で親父さんを説得に行こう
じゃないか。竹内君、人生を変えるには勇気がいる」

竹内はじつとうなだれて二人の意見を聞いていた。修は3人
の顔を見比べながら何度もうなづき聞いている。

「どうや竹内君、頑張つてみんなと一緒に
法華経をやろうやないか!」

修は竹内の両手を握り締めて力強く叫んだ。

「・・・親父が何というか」

竹内はやつと顔を上げた。その瞳には涙が一杯たまっていた。
苦渋に満ちた苦悩の極致。

『これはいかんな、追い詰めたらあかん』
修は背筋がぞつとしてすぐさま一喝した。

『ま、堅い話もなんだから、気分転換に大文字山にでも登つて
来いよ。頂上まで上ればこの京都の町がよう見える。何年か前

に大文字の送り火の夜に近くで大きなかがり火を焚いて大を犬
にした学生達がいたらしいが、その辺くらいうままで行ってみ

鈴木と涌井は、ふと我に返つたように微笑みながら、
「そうですね、元気一杯登つて来て、夜に又伺います」

「くれぐれもあまり深刻に思いつめないよう竹内君、ええな」
「あ、はい」

竹内も微笑みかけてはいたがその眼差しは虚ろで顔色も青かつた。

大文字山

夕方日暮れ近くになつて鈴木と涌井が戻ってきた。ふたりでまだずつとしゃべり続けている。雰囲気が変だ。病的で異常だ。周りを全く無視して二人

だけの空間がブラックホールのように異様なバリアをはつて、他を寄せ付けない。濃い灰色のバリアの中でふたりはぼそぼそと周りのエネルギーと生命力を吸い込んでいく。

「おい、君たち！」

大きな声で修は叫んだ。はつと我に返つてやつとふたりは現実に、今の状況が認識できたみたいだ。

「どうしたんだ、ふたりとも！」

修はさらに大声で叫んだ。不気味な邪悪なものをその背後に感じたからだ。まさに不吉な予感がした。

「竹内は？」

「は？ 竹内とは大文字山の頂上付近で別れました。ちょっとと一人で考えさせといてくれということだったの」

「ばかやろー。ずっとその調子でぶつぶつと思いつめしゃべりながら3人で登つて行つたのか？」

「はあ、そうです。竹内は黙々としていました。やっぱり父親には逆らえそうもありません」

「そんなんわかっどる。今すぐ結論出さんでもええやないか。

あこつ死によるが。今からすぐ引き返してなんとしてでも探し

「そんなばかな？」

「何言うてる。異様やつたぞ、お前ら戻ってきた時」

修はもう外に駆け出していた。鈴木が続く、涌井がさつきよりさらに青い顔をして後を追ってきた。御影通りから白川通りを下つて銀閣寺へ抜ける。山門の前を左折してすぐ右折、

大文字山の登山道に入る。細い山道だ。大文字山も結構入り込むと山深い。猪が出るくらいだから迷うと深くて危険な山なのだ。沼や池、沢や谷もある。

もうあたりは暗くなりかけていた。山頂のかがり火台付近に着いた。鈴木が説明する。

「ここいらで涌井と話し込んでいたら、ちょっと一人で考えさせといてくれと後ろ向きに、ここいら辺に腰掛けていたかと思つたら、いつのまにか姿が見えんようになりました。

10分ほど竹内と呼びながら探したんですけど、一人で先に下山したかと思うて、僕らも下へ降りました」

「たけうちーたけうちー！」

と叫んではみたが、もつあたりはかなり薄暗くて危険だ。

「すぐ下山して竹内の下宿へ行つてみよつ

「はいー！」

3人は大急ぎで大文字山を下りた。不安が半分、多分下宿に

返つてるだろう。灯が灯り始め京の夜景も心なしかすごく寒い。もう1-2月だ、夜は相当冷え込むぞ。まさか山中に迷つている

とは思いたくないが、どうしても不安がよぎる。足早がさらに早くなつて、百万遍の竹内の下宿に着いた。3人とも息が切れている。やはり竹内はまだ帰つていなかつた。

下宿の入り口で3人はたたずんだ。大きく深呼吸する。

「しばらく待とう」

3人はうずくまって30分待つた。

「何か食べてるかもしません」

鈴木が言つ。

「それやつたらそれでええ。9時まで待つて帰つてこなかつたら、法華経研究会の先輩に相談しよう。民青の方にも知らせといたほうがいいかも知れんな」

山狩り

とうとうその晩竹内は帰つて来なかつた。

翌朝、法華経研究会が30人ほど集まつてくれて大文字山付近を一日中捜した。

「人騒がせな奴やな。ちやつかりどつかで旅でもしとるんとちやうか」

とうう先輩もいたが多くのメンバーは真剣に探してくれた。ひょつとしたらの思いも虚しくとうとうその日も暮れて竹内はついに現れなかつた。

岐阜の親元に連絡をする。翌朝両親は飛んできた。民青のメンバーも数十名集まつて対策を練つていた。

両親は警察に捜索願を出した。

消防団も加わつて翌朝から山狩りをすることが決まつた。

よく早朝、両親は鈴木の下宿を訪ねてきた。鈴木は竹内の実家に泊まりにいったこともあり懇意で、詳しく述べて一日の状況を説明した。

「2・3日の旅費くらいは持つてゐるだろうから、どつか旅してゐんじやないかな。前にこついう事が一度あつたから、そうあつてくれと鈴木は祈つた。

朝9時、大文字山の頂上付近。かがり火台を前にして法華経研究会40名と民青30名、消防団20名と

「ただ今から竹内誠君の二両親の要請を受け、一昨日から大文字山頂付近で行方不明になつた誠君の捜索を開始いたします。結構山は深いですから絶対にチームから

離れないように別行動をとらないようにお願ひします。こちら側の皆さんは哲学の道から若王子、鹿ヶ谷方面へ。こちら側の皆さんは大文字山の側面を山道沿いに下つて山腹から鹿ヶ谷へ抜けて先ほどの皆さんと合流し、正午には現地へ戻つてきてください。消防団の皆さんは、我々と共に山頂方面から奥山に分け入り大回りして

周辺捜索をお願いいたします。声をかけながら慎重にお願いいたします。以上、解散、出発!』

修は巡查長の指示を聞きながら、

『えらい事になつた、人騒がせかもしらん。それならそれでいい、もう手をついて俺が謝れば済むことや。一生悔やまれる』

しかしそうでなかつたら、俺は一体あの時何で大文字山へ気分転換に行って来いなんて言つたんやろ?』

『一生悔やまれる』

いやみな先輩が氣休めのつもりか、
『どうか汽車にでも乗つて旅してるとやと思つて』
と言ひながら、三々五々、

『たけうち一つ!』

と叫びながら山道を下り始めた。

民青の連中は統制は取れているが揃ってひ弱そつだ。
ばらばらで勝手気ままな法華研とは対照的で、皆顔を

背けてあっちを向いている。一様に沈痛な面持ちで
哲学の道へと下りていった。竹内と叫びもしない。

法華研のコースは下駄履きではとても歩けない獸道だ。
木もつうつそうと茂っていて大きな枝が頭上を覆う。

不気味な中で皆で声をそろえて叫ぶ、

「たけうちーっ！」

何度も叫びながらそろつそろつと前進した。

深い藪から突然沼みたいな池みたいなおどりおどりしい所に出た。

もしかしてこの中に?想像しまいと思いつつも、大都会をすぐ足元に控えて一步紛れ込んだら、こんな恐ろしい別世界が広がっているなんてと、やつとのことで広い道へ出て民青と合流した。

正午に元の頂上付近で再び集合。皆半分不安を残したままある程度心は落着いていた。

巡査長があいさつする。

「皆様」苦労様でした。竹内誠君はこの大掛かりな搜索にも発見することができませんでした。数日分の旅費は持つておられるみたいなので、

恐らくどこかに旅行などされておられるものと察せられます。近日中に連絡がご両親の元へ必ずあると思われますし、ふと下宿のほうへ

返つてこられるかもしませんので、その時は温かく迎えてあげてください。本口は皆様
どうもありがとうございました

ご両親も最後にお礼を述べられた。

皆が去つた後にお母さんは修たちに言った。

「受験前にもこういうことが一度あって、

その時は3日目にそつと家に帰つてきました。

今回も明日くらいに実家のほうか下宿のほうに

そつと帰つて来るかと思われますので、私達も
急いで帰ります。鈴木さんとお友達の方、それに
これだけ多くの方々が誠のために動いてくださ
って、ほんとにありがとうございました」

そつ言ひて、両親は岐阜へ帰つた。

そしてよく朝早くである。鈴木の元に電話が入り、
死体確認のため大至急鹿ヶ谷へ来るようとに警察
から連絡が入つた。昨日の搜索範囲よりさらに

滋賀県方面へと登りつめた奥深い山中で
木の枝に首をつって竹内は死んでいた。

猪狩りのハンターが早朝に発見したそうだ。

死亡推定時刻は3日前。竹内は鈴木達と別れたその
晩、道に迷うかあるいは自ら進んでわざと迷つたか、
ついに死神に取り憑かれて首をつっていたのだ。

何が人生なのか分からなくなる。残念でしうがない。
人つ子一人救えない、無常そのものだ。

死体は川端署の裏手の常泉寺に安置された。その晩

横に寝かされた遺体に向かって、右側に法華経研究会のメンバーが20人ほど。左側に民青のメンバー20

人ほど。冷たい中、皆押し黙つたまま椅子に座つてご両親の到着を待つた。ふと修は鈴木を誘つて酒を買いに出た。一升瓶を2本。外は寒く、日暮れて

雪が降り始めた。うつすらと暗い中、道の中央部分が白くなりかけてきた。ふたりの靴跡が規則正しく点々と続く。修と鈴木は無言のまま歩み続けた。

つま先も心の中も全てがしんしんと骨の髓まで凍りつくような12月の夜更けであった。

銀閣寺参道

銀閣寺参道、少し坂になつていて300mほどの参道が門前まで続く。民家と商店が点在して土塀や石垣がところどころに続く。道幅は6mくらいだ。

道の両脇が溝になつていてこの溝に入り込んで道路辺端に90cm×180cmの黒別珍布を敷くとちょうどよい路上店舗になる。常連は革細工のアラジン。

手作りアクセサリーの流民舎。立命の帽子屋。テキヤの和尚。時々修の後輩の蓮井がギターを弾きに来たりしていた。

他の観光地では高台寺の親分。三年坂の夫婦。新京極の将軍等、各地にそれなりの名物ヒッピーがいた。

銀閣寺では早朝テキヤの和尚、本物ではないがスキンヘッドでいつも血色がいい、この和尚と修が場所を決めるのだ。だんだんと場所取り時間が早くなりすぎてきりがないから

和尚と修とで午前6時と取り決めた。大前さん所の石垣の下に布を敷く。昼忙しい最中に厚子が来た。いつしょに溝の中に入り込んでバスケットを持つてしゃがみ込んだ。昨日の晩に電話があつたのだ。

「よう

「お久しぶり。こんなか入つてもかまへん?」

「ああ、かまへんよ。今晚嫁さん帰つて来るよ、

夜になつたら会えるけど」

「「うん、もうええのん。夜には東京行くし」

「あそう、だれかに会いに?」

「そんなんちやう。そろそろ私も遠くへ旅に出ようと思つて、どこか行かへんかったらみんなの話についていけへんもん」

なるほどやうかもしけないが、近寄りがたい一重まぶたのこの京美人が、無邪気に溝にしゃがみ込んでお客を見ながら呼び込んでいる。ベージュのベレー帽に茶色のセーター、ジーパンがよく似合ひ。

「どうですか? ネームバッヂ、パパパと作りますよ」とか言つてゐる。厚子はバスケットを開けて、

「サンデイッシュ食べはる?」

「ほんと? ありがと? 」

「」

「」

「」

「」

「」

「それ、どういう意味?」

「うん、ちよつとな言いにくいけど離婚するかもしねない

お客が付いて話はいつたん途切れた。忙しくなつてきた。

1円の針金を丸めて300円で売る。1日100個は作る。夜は又別である。これで生活は十分やつていけてた。

「始めて妊娠した時。姫が、2階のおばあちゃんも、これは男の子だと言うので名前まで決めてまちに待っていたんだ。それが女の子だったからって今までやがてこと」とを言へ。

俺はとも子がとても可愛いし、そんな事ひつとも思つてはないんだが、返つて智子に悪いと思つてゐるくらいだ」

「ふたりめは？」

「それなんだな、君子はもうふたりめはいらないと言つて、俺は欲しいし。原因はそれだなきっと

「・・・・・」

「俺の先行きにも不安なんじゃないかな。明確な将来が見えないし、法華経にばかりかぶれているし。俺一人海外を走り回つてゐるし。相当不満だとは思うよ」

「そうやね、おふたりを見ると世界一幸せそのもの、魅力一杯で皆が自然と集まつてくるんやと思つのやけど」

「ああ、最高の夫婦やと自負してきたけど、先輩に相談したら、決して彼女を束縛してはいけない。あなた自身との戦いだ、彼女のせいにするのは大間違いだといわれた。

そろそろ結論を出さなくてはと思つてるとこ」

「そう、私もそろそろ結論を出そつかと、今晚東京に出てどこか遠くへ旅に出ることに決心したとこ」

「そうこうことだったのか

「いや、そやから君子さんといろへ電話したの。お話できてよかつたわ。いつ帰つて来るか、今度いつ会えるか分からへんけど、これでなにかすつきりしたわ。それ、それの旅立ちつてわけやね。お互い頑張りましょ。今晚君子

さんが帰つて来たらもう一度じつと語じ合つてみたが

修は厚子の瞳をじつと見据えた。

「うん、よく分かった。もう一度語じ合つてみるよ

視線をはずして修は遠くを見て思つた。

『もう語じ合つてもだめだ』

間が空いた。修の横顔に厚子の視線を感じたが、もう見返すことはできなかつた。

「じゃあ、私行くし。これから荷造りせえへんと。初めての旅立ち、たいへんや

「ああ、がんばつて。できればあつちで会いたいね。連絡くれよな

「もううん。何年かいるつもりやから落着いたらすぐ手紙出し、ほな

「あつ、若し困難にぶつあたつて、どうしようかと思ふよしづなことがあつたら、東の空に向かって南無妙法蓮華経と唱えろみな

「あ、それって法華経のこと?」

「うう。難しこことは分からなくていいから、勇気が湧いてくるまで唱え続けろよな。決して死んだりしちゃダメだぞ。生き延びていれば又会える

いつになく真剣に言い放つて、
修はやつと厚子の瞳に目を向けた。

「よく分かったわ。約束する」

真顔になつて厚子は修を見つめなおした。
修はふつと笑みを浮かべてうなづいた。

「それじゃあ、君子さんと智子ちゃんによろしく
「ああ」

ずっと彼女の後姿を見送つていた。誰でもいい、
時が時だつたらそれは君だつたかもしれない。
今度こそ死なないで、何年か先に君に会いたい。

心の中でそう叫んでいた。生きて生きて生き抜いて
くれよ。祈りを込めて厚子の後姿を追い続けた。

翌年修は卒業して保険会社に就職した。

東京での新入社員研修で最優秀の一人に選ばれたが、どうしても海外買い付けと商売への思いが捨てがたく、

半年で退職して新京極にテナントを借りた。そして2年後、清水坂の大型土産品店の店頭に2店目を出店したばかりだった。昼夜清水を見て夜新京極に入るそういう生活パターンだった。

この頃は生活もかなり厳しく君子は夜のアルバイトに出てふたりの間は完全に冷え切っていた。

その秋口の淡い日差しの中で厚子と再開したのだ。

『明日も来るだらうか？この坂のすぐ下に住んでいる。しかも生まれたばかりの赤ん坊とふたりきりでとは何か訳があるので』

近すぎて心が落着かない。

『実家は伏見稻荷のはずなのに、この清水坂下とはどういうわけだ。父親は一体誰だ？欧米人のハーフでもなく、もちろん俺の子でもない』

夕方閉店して新京極へ向かう。3年坂、2年坂、高台寺と下り、八坂から四条に出て大橋をわたる。

鴨川土手には等間隔にカツプルが座っている。

狭い先斗町を北に上がりて歌舞練場から新京極六角にいたる。急げば30分の道のりだ。

新京極は河原町通りの一筋西のアーケード商店街で、四条通から錦通り蛸薬師通り六角通りを順に横切り北上して三条通に突き当たる。

この三条通手前のだらかな坂をたらたらと上り。六角広場の東側に誓願寺という寺があつて、向かいがスーパーのサカエ。

松竹座の映画館とにはさまれた六角の角にポップGというメガネライター屋がある。10坪くらいの広さの角2坪が修の店だ。ネーミングアクセサリーのほかインド雑貨も置いてある。すさまじいラッシュは夜の7時から9時までの2時間である。

夜6時半をまわると新京極の雰囲気はがらりと変わる。商店街の空気がピーンと張り詰めてきて、東西南北、三条通り、四条通り、蛸薬師通り、六角通り、この夜ませて続々と新京極に向かってくる。

チラツと三条たらたらの先に学生服が見えた。そのとたんに、東西六角通りと蛸薬師通り。南北三条から四条から、わずか10数分の間に新京極は黒い学生服でびつしつと埋め尽くされ身動きできなくなる。

六角広場は集合場所にもなつていて、点呼とぞわめきと学らん集団。とにかく万引きされないようこ、元

よく見張りながらペンダントに名前を彫りまくる。3台のリューターでびつしり2時間。相当な売り上げだ。しかしそれも春3ヶ月秋3ヶ月のシーズンの間だけだ。9時きつかりにすべてが一瞬にしていなくなる。わずか10数分でがらんとしてしまう。

そして一斉にシャッターが閉まる。知る人ぞ知る、新京極修学旅行生軍団のすさまじい嵐だ。

修はそのままの口上での空でネームを彫っていた。

『君子に言つべきかどうじょう。

吉川厚子のこと。もう5年になるのか』

5年前、銀閣寺での別れの事は、その晩すぐに話した。
修は隠し事がとてもできないたちなのだ。

祈りを込めて見送った厚子の美しい瞳と後姿が
まるで昨日のことのよみがえる。

家に帰つて君子の帰りを待つ。君子は半年前から
三条京阪にあるベラミといつ高級ナイトクラブで
アルバイトを始めた。インド帰りのアコちゃんが

ずっとホステスをしていたからだ。周に3日だが
その晩の夜食は修が作る。修の得意は焼き飯と
卵スープ。とも子は来年から小学校に入る。

もう6歳だ。ちゃんとお手伝いもするし明るく元氣で
人見知りしない利発な子だ。男の子だと信じていたから、
どうしても負い目を感じる。仲良しの親子なのだが、
やはり男の子が欲しい。

「お前も弟が欲しいやろ?」

「聞くと。

「うん」

と素直に返事する。君子がかわいそうだ。もうこの話は止めといつ。君子が帰つて來た。12時を回つてゐる。

「ただいま」

お酒の仕事

「今日とこかの講員さん達の席に一いて舞妓さんと一緒に

君子はいつもの関東弁で歯切れよく、ブーツを脱ぎながら背中越しに話しかけてくる。とも子と修がお帰りといつ。

「おつかれさん。そう、それは良かつたね。
おかげで早く食べよう」

「そうね、お待たせ。お疲れ様。 いただきます!」

したたれや」

おじいちゃん、ほんとに修の焼き飯は上手ですね。

もぐもぐと美味しいようにみんなで食べ始める。

清水で驚いたことがあるたよ

「あからかといふといふとかな」「なによ? もつたいぶつていないで言つて」

「あの吉川厚子さん、憶えているだろ。赤ちゃん連れて清水の店に来た。誰かがずっと立つてこちらを見つめているんで、よく見たら厚子さんだ。伏見稻荷じゃなくて

清水の坂下に住んでいるらしい、赤ん坊とふたりで。何か訳がありそうだったけど話す時間がなくて。近くだから又来ると言つてた。少しやつれたみたいだつたよ

「そう、何か色々とあつたのね」

「そうだと思つ。今度会つたら内にも遊びにおいでと言つとくね」

「そうね、だけどこつちも大変だからね。5年前は皆時間があって自由で華やかだったけど、今は何かと重荷を抱えて大変なんじゃないの？」

「ああ、そうかもしれないね」

何かあまり気のない返事だつた。ぎくしゃくとした夫婦の間のことだから、前みたいにもう手をあげて

エネルギーッシュに気配りするだけのスタミナがなくなつて来たのかもしれない。

とも子とふたりだけのおしゃべりをしてこる。もつどこにも修の居場所はなかつた。
最後のお茶漬けを砂をかむ思いでかきこんだ。

清水坂下

果たして翌朝も厚子は来た。

昨日と同じ秋口の淡い日差しの中だ。
なぜかともうれしい。

お客の合間をぬつて、

「夕方又来るし、帰りにちょっとでも
寄つていかへん、このすぐ下やし」

「ああ、30分くらいなら」

そして閉店と同時に厚子は現れた。

つるべ落としの夕陽が長い影を作つて、
清水坂下へと下つた。

東山通りへ一旦出て、消防署の向かいの路地を
奥へ入つた所だ。石置が数十メートル続いてい
て、その一番奥から一軒目の古風な町屋だ。

格子戸をぐぐり抜けると2坪ほどの前庭があつて

紅葉が植わつてゐる。下が台所トイレ風呂場に
六畳二間、一階も一間あつて奥に3坪ほどの裏庭がある。

全部で10数坪の小さな一軒家だ。そんな家が狭い石置
をはさんで10軒ほど、黒塀もあつて、とにかくどんな
人が住んでいるのか全く見当がつかない。

居間のテーブルを挟んで座つた。熱いお茶が出る。
いい香りだ。あきらを膝に抱いてあやしながら

厚子は語り始めた。

「IのJの父親は韓国人やの。まだ留学生でスペインのマドリードにてるわ。ほどのつ帰国して父親の事業を継いで社長にならせる

そつやけど、みづわからんわ。是非、韓国で一緒に暮らさうと何度もきつつけつて、くれはるんやけど、気が重とうなつて、どなつしたらええか今すゞく悩んでるとい」

「やうか、今日は時間がなーから明日。明日は土曜日で修学旅行生は少ないからゆっくと話を聞くよ、」

「おおきい。夕方、寄るし。かんこんえ」「ああ、それじゅ。でも立派なおつせやね」

「亡くなつた父のおまはるのおもやつたらしこわ。その方も父が亡くなると後を追つみづて亡くなつて、

母も体の具合が悪なつて、ずつと空き家やつたんや。伏見稻荷の実家は狭いし、

「やうこいつとか。悪いけどもひ行くわ。明晚ゆつくり聞かしてやーの続き」

秋口とせこつても今日せとても暑かつた。あきらせ心地よせうに眠つていむ。肩までの長い滑らかな髪こ、薄いピンクのカーテン。あきらは額に汗をかいている。

そつとガーゼでぬぐいつつ京団扇で風を送っている。乳の匂いと、成熟しきった母親厚子の何ともいえない香りが、その胸元にひきつけられる。振り払うように修は、

「それじゃ、また明日」

小声でそう言って玄関を出た。季節外れの風鈴の音が向かいから聞こえる。誰かが打ち水をしたのか濡れた石畳を修はハタハタと新京極へ向かつた。

夜の食卓の時君子が聞いた。

「厚子さん来た？」

「ああ、30分ほど立ち話をした。スペインで韓国からの留学生と知りおつて、先に出産のために帰国したけど近々韓国へ嫁入りするそつや。大会社の御曹司らしい」

「そう、だけどとも大変そうね」

「ああ、とても大変そや。清水坂下の家は別モらしいんやけど実家と行つたり来たりして。もう明日には実家の方これから出発らしいからもう会えへんと思つわ」

修は嘘をついた。始めて君子に嘘をついた。

「そつ、残念だけど、やはり落着いた時じやないと、なんとなく会いたくないものよね」

修は、お茶漬けにして最後のご飯をかき込んだ。

土曜日夕方、厚子はいつものようにあきらを抱いてきた。

『これからもずっと毎日来て欲しい。事と次第ではこのまま坂下の家で暮らしてもいい。韓国に行かずにここにいてくれ』

心の底で何かが叫んでいた。今日は用事で遅くなるからと君子には言つてある。週末は何かと忙しく明け方帰ることも何度かあつた。君子とはもうこの5年間夜を

共にしたことがない。一方的に彼女は拒否し続けるのだ。修は毎冬、インドや東南アジアを1ヶ月ほど買い付けの旅をして春からの販売に備えていたが、週末の飲み癖の悪さは、やはりストレスの鬱積であつたのかもしれない。

「どなたかいい人探しなさいよ

と君子に言われたこともある。離婚届はいつでも提出できるように用意してあつた。

「奥さんを拘束してはいけません。開放してあげなさい」

と先輩に言われたこともあつた。修の浮気が原因で離婚なら君子の面子も立つだらうし、世間ではとてもよくある

話で誰も見向きもしない。ひょっとしたうつなるやも知れぬ。ほのかな期待をしつつ我が家の『とき坂下の格子戸をくぐった。

長い話になつた。

「忘れもせえへん5年前の銀閣寺、修さんの祈るよつた眼差しに送られて、あれからすぐに東京に出て、もつパスポートもチケットも持つてたの、言ひそびれて堪忍な。皆と同じ

一人旅をはよしてみよつと思ひてヨーロッパへ出発したわ。

コースに泊まりながら、スウェーデンからドイツ、オーストリア、スイスを周つてスペインで彼と出合つたの。在日3世で日本育ち。

おじいさんが韓国で貿易会社を経営して、一族には日本人の奥さんも何人かいてはるそつや。日本には深く理解があるから言ひて、写真をいつも見せてくれてたわ。それでも一度別れて

英國からフランスへと旅をしてたら、彼、学校をほつたらかして追いかけて来はつたんよ。あと3年、しっかりと学業を全うして資格を取つて是非韓国に私を連れて帰りたいと言ひて

「すゞく感動的やんか。映画みたいやね」

「そう言つて泣かはんのよ」

厚子は当時の思い出に瞳が潤んでいた。

「それでとにかく一度日本に帰らして言ひて頼んで、心の準備と他にも色々と準備して又必ず戻つてきます言ひて一旦帰国したの。ほとんど毎日手紙が来るし親宛の手紙も入つてるし、親に打ち明けて一大決心スペインへ戻つたわ。そして3年。いろいろあつたけど子供ができても。いざれにしても生むことに決めてたから。私独りでも何とか生きていくると思いながらも、やっぱり大変。

母や兄は『京都にいる、生活の面倒は見るから』と言ひてはれる

けど、彼の愛情もたつぱりと重すぎるほどたつぱりと感じてはいる
んやけど、気が重いんやねそれが逆にまた

「それは贅沢とこりもんやで、厚子さん」

「やうかも知れへん。まもなく彼は日本へ帰国してから韓国に
永住する予定。これは間違いないんやわ。周りの人たちは皆
好意的やからと彼は言うてくれるんやけど。ものすごく勇気が

いるの、彼の思ひどりにしたら。それより親子一人でひとつりと
京都で暮らしたほうが、気が楽なような気がするんやけど」

「やうか。難しい問題やな。この子の為こも」

沈黙が流れた。

じつと厚子は修の瞳を見つめる。

修は肘を突いて厚子の瞳を見つめながら、

「このあきらの幸せのためには、どうするのが一番なんやうなあ」
じつと見つめあつたまま、ゆっくつと、と、修はつぶやいた。

「あきらのために」

ほのかなピンク色の唇に吸い寄せられそうだ。
頬杖がふつと前に傾きかけた。その時に、

「この子寝かせてくるわね」
と言つて厚子は、隣の部屋のベーベーベッドに
あきらを寝かせつけに行つた。

ああ、もつたまらん、どうしよう。今夜人生が大変化しそうだ。
なるべくになれば全てが変わる。周りを巻き込んで全てが変わる。

しかし、このあきらのためには、どうしてやれば一番いいのだ。
父親は手紙や写真で見る限り愛情深そうで立派な社長になるだろう。
修は、ひょとしたら横恋慕してこの一家の幸福を破壊しよう
としているのかもしない。

『勇気を出して彼の元は走れ』
と言つてやるのが最も理想的なのだろうが、しかし、

『これも何かの縁だ。俺も限界だ。自分に嘘をつくな。正直に、厚子にむしゃぶりついて思いを遂げよ』

心と体の奥底で本音が叫ぶ。良心が叫ぶ。どうすりやいいんだ。彼女は一体何を望んでいるんだ。ぱっと胸中を押してもいいことを。

どちらの方向でもいい、きつかけを、ものの弾みを、この場の雰囲気は望んでいた。

あきらを寝かしつけて厚子は戻ってきた。もう、何がおきてもおかしくはない。子供ではないのだ二人とも。人生の辛酸をほんのちょっとぴり味わいだした、二人はもう大人そのものだった。

喉がからからだ。修はがぶりと冷めたミルクティーを飲み干して、大きく深呼吸をした。

「今日はちょっとむしむしゃね
ミルクティーを注ぎ足しながら、厚子はじつと修の瞳を、その奥を見据える。

厚子の顔が修のそばまで近づいてきた。口元が微笑みかけている。
『きたか』

修も覚悟を決めて奥歯をぞゅっと歯み締めた。

厚子が修の耳元でささやく。
「いいもの見せてあげましょうか？」
「えつ、なに？」
「とてもいいもの」

そう言つて厚子は修の耳元からすっと離れると、

押入れのふすまをぱつと開けた。

なんとそこには、黒光りする立派な仏壇と法華経の
「ご本尊様が安置されているではないか。

「あつ、厚子さん入信してたんや!」

「わ、スペインで。彼SGHのメンバーやつたん」

「やうが。やうやつたんか」

視界がパツとこつぺんに開けた。重たい灰色の雲間を突き破つて、
天空に一気に舞い出たようだ。まばゆいばかりの太陽が一杯だ。

「こんな時にお題田あげんにやね」

「そつや、こんな時にお題田あげるんや」

「勇氣がいるもんね」

「そつ、勇氣がいるから。幸せを勝ち取るために勇氣がいる。
一緒にお題田あげようか!」

「うん!」

そして白々と夜が明けてきた。全てが通り過ぎ去つて、
とてもすがすがしい気持ちだ。

「ほんまにおおきに、修さん。私の手をつれて韓国へ行く」
「そやな、彼を信じて。とても誠実そうな青年やし、SGH
のメンバーや。韓国も旭日のSGHだよ、わつといまくいく

明け方そつと家に帰る。厚子とともに子がぐつすりと寝込んでこる。
昨日の嘘は今日はほんとになつた。嘘は必ずばれる。
不器用な修であった。

- 完 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5337f/>

清水坂下物語

2010年10月9日11時40分発行